

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 4 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2013

課題番号：23243065

研究課題名(和文)流動化社会における都市青年文化の経時的実証研究 - 世代間/世代内比較分析を通じて -

研究課題名(英文)Time-series research of urban youth culture in liquid society -comparative analysis from inter- and intragenerational perspective-

研究代表者

藤村 正之 (FUJIMURA, MASAYUKI)

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：00190067

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 26,900,000円、(間接経費) 8,070,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では都市を生きる10代後半、20代の若者たちの行動と意識の実態把握ならびに30代・40代との比較を目的に、1992年・2002年につづく3回目の調査を東京都杉並区、神戸市灘区・東灘区で実施した。若者たちの現状把握、過去3回の調査による若者たちの変化の把握、若者世代と中年世代の比較、同一世代の加齢による変化の観点から分析をおこなった。現在の若者たちが安定志向の堅実な意識をもつことが相対的にうかがいあがり、90年代、00年代の若者たちの特徴とされたことが、ある世代が時代からの影響を受けた事象として理解できることなどが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study are to understand behavior and attitude of urban youth in their late teens and 20's, and then to compare them with those of 30's and 40's. Following the survey in 1992, 2002, we conducted the third one in Suginami ward in Tokyo and Nada and Higashi-nada ward in Kobe in 2012. Based on the data collected, we grasped 1) basic conditions of youth and 2) changes in their behavior and attitude through the last 20 years, and 3) we also made comparison between youth and the middle aged on the one hand and 4) between the same cohort in 1992, 2002 and 2012, with their age advancing, on the other hand. The results are that young people nowadays are found to have the stability-oriented and practical attitude towards their life and society, and that what used to be thought as unique features of the youth in '90s and '00s are found to be under strong influence of each period.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：若者 世代文化 流動化社会 青年文化 社会化

1. 研究開始当初の背景

2010年代の政治・経済・社会が流動化するグローバル化の中で、若者たちは社会に翻弄される存在として議論されることが多くなってきた。ほんの20年前まで、若者と言えば自由な生き方の代名詞であったのだが、そのような論調の変化の背景には、もちろん社会構造の変化が影響しているものの、当の若者たちは自らをどのように認識しているのだろうか。

メンバーの世代交代がありながら、30年ほどの研究歴を有する「青少年研究会」では、若者たちの実情を定期的に把握するため、10年ごとの大型調査を実施してきている。今回、2011年度から「科学研究費・基盤研究(A)」の3年間の研究が認められ、1992年(総合研究(A))、2002年(基盤研究(A))の科研費研究につづく、若者文化の3回目の総合的な調査を2012年に行うことができることとなった。この種の総合的・経時的な調査は他にあまり例がなく、今回の研究でもその経験を活かし、3回目の調査では世代内・世代間の比較を盛込んで、若者と社会変動の関係を実証的に考察していくことを課題とした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、都市を生きる若者たちの行動と意識の実態把握を基礎に、彼らの社会化過程における変化とその諸影響を理解することである。その際、今回の調査では、現在の若者たちに先行する世代である30代、40代の世代の行動・意識をあわせて比較調査することで、複雑化する今日の社会化過程を世代内・世代間で実証的かつ立体的に把握することを試みることにした。

今回、30代・40代層を若者たちの比較対象として設定することで、過去2回の調査をふまえ、私たちは、2012年の若者たち(16歳~29歳)の現状の把握、過去3回の調査による若者たちの変化の様相の把握(1992年・2002年・2012年調査の比較)、2012年における若者世代(16歳~29歳)と中年世代(30歳~49歳)の比較、過去3回調査で分析可能なコーホートの加齢による変化の分析(1992年の20歳のものが2012年に40歳となつての比較など)という4つの観点での分析が可能となり、それらに取り組むことを課題とすることとした。

3. 研究の方法

3回目の調査も過去2回と同様、東京都・杉並区、神戸市・灘区・東灘区にお住まいの方々を対象に、2012年11月・12月に調査実施をおこなった。調査概要としては、計画サンプル4200票のうち、若者世代1050票(回収率43.7%)、中年世代719票(回収率39.9%)の回収という結果となった。調査にご回答いただいた杉並区・神戸市の皆さまならびに実査にあたっていただいた新情報セ

ンターのスタッフ各位に厚くお礼申し上げることとしたい。

4. 研究成果

調査は、若者たちの行動や意識の特徴を複数の角度からとらえるために、音楽、メディア、友人関係、家族関係や恋人関係、自己意識、社会意識などに関する調査項目が過去2回の調査との継続や現段階での関心から検討され、フェイス・シートと共にたずねられた(16~29歳票:全52問とフェイスシート15問)。比較対象となる30~49歳のほうでは若年票と同じ項目を基準に、年齢段階に応じて一部異なる項目を組み込むこととした(30~49歳票:全50問とフェイスシート19問)。まずは、16~29歳票の単純集計結果の中から、興味深い主なポイントを確認してみよう。

(1) 基礎集計結果

音楽

音楽のジャンル分けというのは、分類区分にイメージ性が強かったり時代が反映していたり、また本人の認識による相違といった点があるが、好きな音楽ジャンルを聞いたところ、第1位が「Jポップ」75.7%、第2位が「邦楽ロック」38.2%、第3位が「洋楽ポップ」34.3%、第4位が「アニメ・声優・ゲーム」30.8%、第5位が「洋楽ロック」30.0%となった。分類方法によるとはいえ、「Jポップ」が断トツの数値をしめしており、4人に3人がこれを支持している。興味深いのは、「アニメ・声優・ゲーム」が3割の支持で第4位に入っており、いわゆるオタク系文化がマイナーな位置づけであるとか恥ずかしいという印象ではなく、若者たちの間で確実な市民権を得た文化となつてきていることがわかる。

メディア

現代社会のメディア変動として大きいのはインターネットの隆盛であるが、それがPC利用にとどまらず、スマートフォンなどを通じて手近なところで操作可能となつており、自分の手の中にウェブ空間があるような状態になっていることが大きい。そのような状況をふまえ、普段インターネットにアクセスして、どのようなことをしているかを問うと、「動画サイトを見る」がもっとも高く76.9%となり、これも4人に3人がそういう行動を取っていることになる。やや受動的ではあるものの、テレビに比肩しうる映像消費メディアとして市民権を得ている。つづいて、「Twitterを読む・書き込む」45.2%、「2ちゃんねる」を読む・書き込む24.9%、これに「オンラインゲームで遊ぶ」が22.4%でつづいている。「Twitterを読む・書き込む」

が半数に近いが、若者たちにとって140字以内という短文での気持ちや情報の伝えあいに大きな関心があることがわかる。

友人関係

いつの世もそうであろうが、友人関係は若者たちにとって重要な人間関係である。近年は特に交友関係の輪の狭まりと、他方でその狭い範囲での交友関係の密度の高さが指摘されている。そのような友人関係を作るとき、次のようなメディアの使用やその話題が役に立ったことはあるかを問うと、「音楽の話題」47.8%、「テレビ番組の話題」38.0%、「マンガの話題」36.4%、「ブログやSNSの利用」33.5%、「携帯電話での通話やメール」32.0%となった。「音楽の話題」というのが本人の趣味・志向を端的にしめし、他方でジャンルの好みなど相互の違いを認めうる題材となっているのであろう。つづいて、テレビや漫画というコンテンツが、またブログ・SNS・通話・メールといった近年変化の大きい通信事情が交友関係の形成のキー要因となっている。

恋人関係

友人関係とならび、若者たちにとってその時期の特徴的な事象とも言えるのが、恋愛関係の経験であろう。恋愛や恋人関係において重要視することがどんなことか問うてみると、「やさしさ」79.2%がトップであり、これに「一緒にいるときの安心感」73.8%が7割台としてつづく。さらに、「気づかいができる」59.4%、「おもしろさ」51.1%、「趣味に理解がある」49.6%、「生き方・ライフスタイル」44.3%、「顔」43.3%とつづいていく。恋人など相手に求めるものとして「やさしさ」が上位に来るのは数十年続いているわけだが、加えて安心感や気づかいといった恋愛関係にある人との落ち着いた快適な空間という点が重要になっていると判断できる。

自己意識

また、若者時代における精神的な課題として現れるひとつがアイデンティティの形成やそのありようである。時代による変容を大きく受けるところであるが、若者たちに自分に対するいくつかの評価を問うてみると、「自分は友人関係に恵まれている」62.0%がもっとも多く、以下、「性格は悪くないほうだ」45.9%、「他の人になんか特技・才能がある」19.8%、「勉強は得意なほうだ」15.9%、「ルックスは人並み以上だ」14.3%がつづく。6割をこえるものが友人関係からの支えをあげていることは、自分という存在が交友関係によって規定されているという発想がしめされている。また、「性格は悪くない」という自己肯定はちょうど半々という興味深い数値になっている。

社会意識

若者たちの社会への関わり意識もいくつかの設問によって聞いているが、どんなときに充実しているかと問うた質問に対しては、「友人や仲間といるとき」80.8%、「スポーツや趣味の活動をしているとき」67.2%、「親しい異性といるとき」45.4%、「家族といるとき」44.1%、「他人にわずらわされずにひとりであるとき」37.1%、「仕事やアルバイトをしているとき」37.1%が高い数値となっている。基本的には、友人・仲間・恋人・家族といった人間関係の中での充実感が回答されているが、ひとりであるときの充実感を唱えるものも4割に近い。

(2) 時系列比較の試み

今回の調査が92年、02年、12年につづく3回目の調査であることから、3時点比較が可能な設問、2時点比較が可能な設問がいくつかある。それらにより、ある一定の方向への傾向が確認できる事象もあれば、それら比較された時点の間に大きな変化がなくむしろ安定的な傾向をしめす事象がある。主なものをひろってみよう。

まず、3時点の変化の傾向が顕著なものである。「どんな場面でも自分を貫くことが大切だ」に関して、「そう思う」と「まあそう思う」をあわせて「思う」として集計すると、「思う」は92年で69.0%、02年で54.9%、12年で51.5%となる。あきらかに自分を押し通すという方向性が歓迎されないものとなってきており、自己主張をするという形では弱くなってきている。同様に、「自分には自分らしさというものがある」という問いに対して、「そう思う」と「まあそう思う」をあわせた「思う」を見ると、92年で89.1%、02年で85.2%、12年で76.9%となる。現在でも76.9%と、4人に3人が自分らしさがあると答えているものの、20年前の92年のその数値が89.1%と10人中9人が答えていることと比べれば、自分らしさに自信をもてないものが一定程度増えてきているということがわかる。これら2つの質問からは、自分を貫くことが高くは評価されず、自分自身にも自信をもてない層がある程度増えてきているということはいえよう。

つづいて、逆に3時点の調査で大きな変化がなく、安定的な数値をしめすものを見てみよう。「将来に備えて耐えるより、今という時間を大切にしたい」という設問がそれであり、「そう思う」と「まあそう思う」をあわせて「思う」として見てみると、92年は62.7%、02年は61.1%、12年は62.4%となる。今という時間を大切にしたいものが約6割、将来に備えて耐えるとするものが約4割という比率がここ20年間安定的な形となっている。

また、92年から02年にかけて上昇し、02年から12年にかけては変化が少ないものとして、「社会や他人のことより、まず自分の生活を大事にしたい」という設問があげ

られる。「そう思う」と「まあそう思う」をあわせて「思う」として見てみると、92年は68.0%なのだが、02年は79.0%と上昇し、12年は80.8%と微増している。強く言えば、いわゆる「ミーイズム」という発想になるが、全体として92年においても7割程度と定着してきているところ、02年に8割に上がり、12年もその比率は継続しているということになる。

以上のように、3時点で一定方向の変化が見られるもの、大きな変化なく安定しているものに加え、詳細に見れば山型・谷型など数値の動きが反転するようなものもありうるかもしれない。反復調査による蓄積の利点というものがこれらのデータには表れていると言えよう。

(3) 世代比較の試み

今回の調査では、16~29歳の比較対象として30~49歳を設定し、一部年齢にあった設問に変えた部分はあるものの基本的には同じ調査票にて調査を実施した。その結果、16~29歳という若年層と30~49歳という中年層との比較が可能であり、同時に過去2回の若者調査のデータを有することから、一部の質問にとどまるものの、特定コーホートが92年調査の20代、20年調査の30代、12年調査の40代という形でどう変化してきたかを追跡することも可能となっている。分析結果については今後の発表・報告ということになるが、ここでは、16~29歳という若年層と30~49歳という中年層の比較から興味深いデータをひいてみよう。

まず、先に16~29歳での好きな音楽ジャンルについての回答をふれたが、これを30~49歳の中年票で確認するとどうか。結果は、第1位がJポップ67.7%、第2位が洋楽ポップ32.7%、第3位が洋楽ロック31.2%、第4位が邦楽ロック30.1%で、第5位がクラシック30.0%であった。Jポップが断トツで、若年層では75.7%であったが、中年層でも67.7%であり、他のジャンルが30%台で競っているという構造はかわらない。中年層ではクラシックが第5位に入っているのが特徴で、若者層で30.8%で第4位だったアニメ・声優・ゲームは12.1%と大幅に数値を落としている。クラシックへの関心が年齢の高い層で多く、また、オタク系文化の浸透ということは中年層にまではおよんでいないことがわかる。若年層での変化がそのまま年齢の上昇とともに中年層の変化としてもひきおこされていくのかは今後の経験に開かれている。

若年層と中年層の比較において興味深いものとして、自分への親しい人や世間の視線という問題を取り上げてみよう。「親しい人から自分がどう思われているかが気になる」という回答は、「よくある」と「ときどきあ

る」を合わせた「ある」について、16~29歳で60.2%なのに対し、30~49歳では39.9%である。同様に、「親しい人以外の世間から自分がどう思われているかが気になる」という回答は、「よくある」と「ときどきある」を合わせた「ある」について、16~29歳で51.5%なのに対し、30~49歳では30.3%である。共に20%をこえる数値差となっており、若年層のほうが親しい人ならびに世間からの視線を強く感じていることがわかる。

同じく、「一生懸命物事に取り組んでも成果に結びつかないと意味がないと思う」への回答は、「あてはまる」と「ややあてはまる」を合わせてみると、16~29歳で48.4%なのに対し、30~49歳では30.1%である。努力が結果に結びつくことを期待するという姿勢は若年層に顕著であり、中年層は努力が結果に結びつかないこともあるし、そうだからといって意味がないわけではないという判断をくだしているというふうに考えられるだろうか。

また、若年層は常に革新的な意見の持ち主であるということもない。「親が年をとって、自分たちだけでは暮らしていけなくなったら、子どもは親と同居すべきだ」への回答は、「そう思う」と「まあそう思う」を合わせた「思う」を見てみると、16~29歳では69.1%なのに対し、30~49歳では60.1%である。高齢期における老親との同居とそこでの扶養をほぼ7割の若年層が支持するのに対し、中年層でのそれは6割にとどまる。若年層のほうはまだ比較的元気な自分の親を想定しながら答え、中年層は今後予想されるあるいは現在経験中の自らの年老いた老親の世話を想定しながら現実的に答えているという可能性も高いが、若年層のほうで親子関係を重要視する態度をしめしているということは興味深い。いわゆる「ゆとり世代」とも言われ、ほどほどの目標で満足し、あまり競争を好まない世代層として言われるが、それが親子関係の良好さと子どもの側からの好意的対応につながっているということも予想されよう。

以上、「都市住民の生活と意識に関する世代比較調査」に関して、単純集計、3時点・2時点の時系列比較、世代比較について、興味深いデータをいくつかひろってきた。2012年の単年度の若者の意識や行動の分析にとどまらない広がりのあるデータセットとなっていることが理解できる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

土井隆義「つながり依存としてのネット依存」『公衆衛生』2014年7月号、2014年、印刷中(査読無)

土井隆義「つながりに引きずられる子どもたち」『児童心理』2014年6月号臨時増刊、2014年、印刷中(査読無)

西村美東士「社会形成者の育成の観点に立った生涯教育学序説 若者の10年間の変化とその対応のあり方」聖徳大学生涯学習研究所『生涯学習研究』12号、2014年、23-32(査読無)

西村美東士「この20年間に若者の意識、生活、考え方はどう変化したか—個人化に対応する青年団体育成の方法を考える」『社会教育』812号、2014年、26-33(査読無)

永井純一「定量調査からみる若者の音楽生活 コミュニケーションツールとしての音楽」『神戸山手大学紀要』15号、2013年、153-162(査読無)

藤村正之「都市住民の生活と意識に関する世代比較に関して—その概要から」『新情報』101号、2013年、11-19頁(査読無)

〔学会発表〕(計7件)

木島由晶「現代青少年の文化と意識(1)音楽へのコミットメントと文化的寛容性」日本社会学会・第66回大会、2013年10月12日、慶應義塾大学

木村絵里子「現代青少年の文化と意識(2)恋愛関係の諸相」日本社会学会・第66回大会、2013年10月12日、慶應義塾大学

辻泉「現代青少年の文化と意識(3)友人関係の変容」日本社会学会・第66回大会、2013年10月12日、慶應義塾大学

阪口祐介「現代青少年の文化と意識(4)メディアと生活の相互関係の変容」日本社会学会・第66回大会、2013年10月12日、慶應義塾大学

牧野智和「現代青少年の文化と意識(5)自己啓発書を読むことと自己意識との関係」日本社会学会・第66回大会、2013年10月12日、慶應義塾大学

寺地幹人「現代青少年の文化と意識(6)経済的成功に対する考え方の特徴と変化」日本社会学会・第66回大会、2013年10月12日、慶應義塾大学

浅野智彦「若者の「幸福」は逆説なのか」日本社会学会・第66回大会、2013年10月12日、慶應義塾大学

〔図書〕(計2件)

土井隆義『つながりを煽られる子どもたち』岩波書店(岩波ブックレット)、2014年、88、印刷中

溝尻真也著(目白大学社会学部メディア表現学科編)『ポピュラー音楽の現在とメディアの変容』『メディアと表現 情報社会を生きるためのリテラシー』学文社、2014年、240(うち119-133)

〔その他〕

ホームページ等

青少年研究会 <http://jysg.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤村 正之(FUJIMURA, Masayuki)

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：00190067

(2) 研究分担者

羽瀨 一代(HABUCHI, Ichio)

弘前大学・人文学部・准教授

研究者番号：70333474

岩田 考(IWATA, Kou)

桃山学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：60441101

浅野 智彦(ASANO, Tomohiko)

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：00262220

辻 泉(TSUJI, Izumi)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：00368846

辻 大介(TSUJI, Daisuke)

大阪大学・人間科学研究科・准教授

研究者番号：50292786

木島 由晶(KIJIMA, Yoshimasa)

桃山学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：80513176

(3) 連携研究者

小川 博司(OGAWA, Hiroshi)

関西大学・社会学部・教授

研究者番号：80185511

南田 勝也(MINAMIDA, Katsuya)

武蔵大学・社会学部・教授

研究者番号：30412109

西村 美東士(NISHIMURA, Mitoshi)

聖徳大学・人文学部・教授

研究者番号：90237743

土井 隆義(DOI, Takayoshi)

筑波大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：60217601

加藤 篤志(KATO, Atsushi)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：50257226

苔米地 伸(TOMABECHI,Shin)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号： 80466911

永井 純一(NAGAI,Junichi)
神戸山手大学・現代社会学部・講師
研究者番号： 90552828

溝尻 真也(MIZOJIRI,Shinya)
目白大学・社会学部・講師
研究者番号： 50584215

久保田 裕之(KUBOTA,Hiroyuki)
日本大学・文学部・准教授
研究者番号： 40585808

阪口 祐介(SAKAGUCHI,Yuusuke)
桃山学院大学・社会学・講師
研究者番号： 50589190

牧野智和(MAKINO, Tomokazu)
日本学術振興会・特別研究員
研究者番号： 00508244